

# 女王2人 迫真の愛憎劇



ドニゼッティの「マリア・ストゥアルダ」は歌唱、演技ともに高い水準の、しかもキヤラクターの異なるソプラノを2人必要とするオペラ。そのこともあってか、上演される機会は極めて少ない。

川西市文化財団主催のみつなかオペラは、尾崎比佐子と並河寿美という2人のプリマ

## 音楽評

・ドンナを得て、それを実現させてしまった「写真・仲野達也さん撮影。2人はともに実力をいかになく発揮。2人の女性の愛憎と自負心が交錯し火花を散らす迫真のドラマを、とりわけ歌唱の力で紡ぎだした。

舞台は16世紀イギリス。フランス王からの求婚とともに、政敵として幽閉していた

ドニゼッティ「マリア・ストゥアルダ」(19日、兵庫県川西市みつなかホール)

スコットランド女王マリア(尾崎比佐子)の処遇に悩んでいたエリザベッタ女王(並河寿美)は、愛するレスター伯(松本薫平)のマリアへの熱愛を知り、彼らの命乞いにもかわからずマリアを断頭台へ送り込み、彼女もそれを甘受して死の旅路につく。

この流れの中で、処刑への迷いと嫉妬に心悩ますエリザベッタは第一幕冒頭からいきなり負のヒロインとして登場し、マリアとの激しい応酬を経て侮辱され、その結果処刑を決する幕切れまで歌い切らねばならない。並河は豊かな声量を武器に、微妙な心の揺れを感じさせつつも、決して優位に立つ女王の威厳を失わない歌唱を聴かせ、マリアを照射する人物像を描いてみせた。

実はエリザベッタとマリアは双頭の鷲。王家に生まれ、政争の中で権謀術数を身につけ、異性を恋うことも同じ。一方がふてぶてしく、他方が薄幸のヒロインというわけではない。尾崎はそこを見事にとらえ、恩赦を乞う自らが助からないと知るや怒りに燃える女王となってエリザベッタを罵倒。ほとんど独り舞台となる第2幕ではさらに、ぶれない「強い」女性へと変身した。

指揮は牧村邦彦。いつものような職人芸。演出井原広樹。演奏はザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団。20日は別キャストで上演。(網干毅、関西学院大学教授・音楽学)